

周恩来の対日「民間外交」の原点を探る：
百年前の「雨中嵐山」を読む

WANG, Min / 王, 敏

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

17

(開始ページ / Start Page)

3

(終了ページ / End Page)

52

(発行年 / Year)

2020-03-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00023214>

周恩来の対日「民間外交」の原点を探る ——百年前の「雨中嵐山」を読む

王 敏

はじめに

周恩来の名は日本でいまもよく知られている。生まれは1898年3月5日、江蘇省淮安市。激動の歴史を生きた。13歳で、1911年の辛亥革命を体験。12年には清王朝の崩壊、中華民国が建国した。13年に天津の南開中学校に入学、17年9月卒業すると10月日本の東亜高等予備学校、東京神田区高等予備校（法政大学の付属学校）、明治大学政治経済科（今の政治経済学部）に通った。日本語の習得不足により第一高等学校と東京高等師範学校の受験に失敗し、1919年春帰国し、中国における新学期の秋9月開学した南開大学文学部に入学した。第一期生の学籍番号62番であった。

1919年は周恩来にとって転機の年になった。日本から帰国して、大学進学の前直前に起きた五・四運動に参加している。青年周恩来は政治に目覚め、翌20年パリへ、欧州留学をした。24年帰国し、25年に学友鄧穎超と結婚した。彼女とは五・四運動で知り合っている。49年建国宣言した新中国で総理に就き、72年には念願の日中国交正常化を実現させた。重症の膀胱癌ではあったが、76年1月8日の死直前まで国事に精励した。

自らの留学経験など、思えば日本との縁は深い。遡れば21歳の周恩来が1919年春、留学をあきらめたものの日本を去りがたく、帰国する前、桜咲くころのひと月余り京都に滞在した。当時まだまだ交通不便な都の西郊の名勝地・嵐山を一日だけでなく二日間も逍遥していた。嵐山散策の心象を、周恩来は「雨中嵐山」という詩に詠んだ。「雨中嵐山」を丹念に読めば、嵐山を雨の中二日間、ひとり静かに歩いた理由が窺える。周恩来にとって、あきらめた

にかかわらず日本留学の体験がその後の青年周恩来を決定づけたものであったことが浮き出てくる。これを書いている2019年が「雨中嵐山」の探訪から数えて百年を迎えたというのも縁を感じる。

嵐山を望む公園に1989年、高齢を迎えた日本国際貿易促進協会京都総局会長（当時）の吉村孫三郎ら日本の有志と日中友好団体の発起により、周恩来記念詩碑が建立された。記念詩碑には「雨中嵐山」が刻まれている。裏面は詩碑建立に貢献した団体や代表者名が並記される。2019年は建碑40周年であった。

1919年4月5日、嵐山に雨が降っていた。周恩来にとって嵐山散策の二日目だった。限られた帰国前の時間を往時は不便な嵐山に充てたのは何か、嵐山の何が青年周恩来を引きつけたのか。それは新中国の総理を背負い、1972年の日中国交回復など一連の対日政策を決断させる周恩来の人間像を彷彿とさせるものであった。

小文では調査研究に基づく分析報告を概述させていただく。

一、「雨中嵐山」への路線図

4月5日に周恩来は、「雨中嵐山」のほかにもう一篇、「雨後嵐山」の詩も詠んだ。つまり、連作である。あわせてこの二篇の詩は、救国の道を探求していた青年周恩来が光明を見出した感銘に満ちている。しかしながら周恩来の嵐山を逍遙に至った背景を考証する資料は、現在この二篇の詩作のみである。嵐山にある詩碑の題は「雨中嵐山」とあるが、詩の原題は「雨中嵐山—日本京都」である。詩二篇とは、

雨中嵐山——日本京都

一九一九年四月五日に作る

雨の中を二度嵐山に遊ぶ

兩岸の青き松に　いく株かの桜まじる

道の尽きるやひとときわ高き山見ゆ

流れ出る泉は緑に映え　石をめぐりて人を照らす

雨濛々として霧深く

陽の光雲間より射して いよいよなまめかし
 世のもろもろの真理は 求めるほどに模糊とするも
 ——模糊の中にたまさかに一点の光明を見出せば
 真にいよいよなまめかし
 (訳：蔡子民 日本国際貿易促進協会京都総局ホームページによる。
<http://www.japitkyoto.jp/shu-onrai/>)

中国語の原作・雨中嵐山

雨中二次遊嵐山、
 兩岸蒼松、夾着幾株桜。
 到尽処突見一山高、
 流出泉水綠如許、繞石照人。
 瀟瀟雨、霧蒙濃、
 一線陽光穿雲出、愈見姣妍。
 人間的万象真理、愈求愈模糊、
 ——模糊中偶然見着一点光明、真愈覺姣妍。

雨後嵐山

山あいの雨が通り過ぎると、雲がますます暗くなり、
 ようやく黄昏が近づく。
 万緑に抱かれた一群の桜は、
 うっすらと赤くしなやかで、人の心を酔わせるほど惹きつける。
 人為も借りず、人の束縛も受けない、自然の美しさ。
 考えれば、あの宗教、礼法、旧文芸……粉飾物が、信仰とか、情感とか、
 美観とかを説く、人々を支配する学説に今なお存在する。
 高きに登り遠くを望めば、青山は限りなく広く、覆い被された白雲は帯
 のようだ。
 あまりの稲妻が、ぼんやり暗くなった都市に光を射す。
 この時、鳥民の胸中が、あたかも情景より呼び出されるようだ。
 元老、軍閥、党閥、資本家……は、今より後、「何を当てにしようとするのか」?

(<http://dalianjingdu.kyotolog.net/%E6%97%A5%E4%B8%AD%E9%96%A2%E4%BF%82/%E9%9B%A8%E4%B8%AD%E5%B5%90%E5%B1%B1%E3%81%AE%E8%A9%A9%E7%A2%91>)

中国語の原作・雨后嵐山

山中雨過雲愈暗、
漸近黄昏
万緑中拥出一叢櫻、
淡紅嬌嫩、惹得人心醉。
自然美、不假人工、
不受人拘束、
想起那宗教、礼法、旧文艺、……粉飾的東西、
還在那講什麼信仰，情感，美觀……的制人学説。

登高遠望，
青山渺渺，
被遮掩的白雲如帶、
十数電光、射出那渺茫黑暗的城市。
此刻島民心理、仿佛從情景中呼出、
元老、軍閥、党閥、资本家、……
從此後 " 將何所恃 "

二篇の詩を読み解くことで、嵐山との一体感が浮かび上がる。周恩来の歩行に相応し、描写された景観のスポットが変化していくのである。まず、「雨中嵐山」が読者に想像させるのは、雨に浮かぶ水墨画に似た風景である。川面がなんとも幽邃で広々と浮かび上がり、流れ出る泉の水は緑のごとく、河畔の山岳がすっと立っている。これこそ景色が突然に切り替わった瞬間となる。そもそも霧雨の朦朧とした中で一筋の光が漏れてきたのである。それは自然よりの論の如く、周恩来が万物真理とは求めるほど感じ捉えられるものだと悟るのである。

「雨中嵐山」に続いて、「雨後嵐山」では雨が止み、「山中雨過」の景観に移り変わる。周恩来が川沿い道の突き当りのところで、山の上のほうへ登っていくと、「青山渺渺」があり、「渺茫黒暗的城市」も見えたとされる。二編の詩に納められた時間帯の前後関係から見れば、「雨中嵐山」が昼間であり、「雨後嵐山」は夕方を過ぎ、夜を迎えてくる頃と考えられる。つまり、1919年4月5日の嵐山行きが一日がかりであった。

筆者は2015年から、雨の中の嵐山を幾度歩いた。百年前の周恩来と同じ空模様のもとで創詩の現場に触れてみたかったからである。そこで一回目の嵐山行きは天龍寺などの名所も含める4月初めの観光と納得したのであるが、そこから4月5日に目指される二回目の理由を突き止める必要に気付いた。

まず二篇の詩の内容に沿って、周恩来の二回目ルートを探ってみる。

周恩来が嵐電（現・京福電鉄）の嵐山駅から渡月橋へ向かい、橋を渡ってから、川の西岸に沿った小道に入り、40分ほど直進して、大悲閣千光寺への参道とわかる急な上がりに入る。渡月橋から大悲閣千光寺までは約1キロ、上りの参道は200段の石段になる。



黎帆作成絵図 雨中二度目の嵐山行きと大悲閣千光寺への路線図

あらためて当時を想う。4月5日、周恩来は友人の家である左京区松ヶ崎堂之上町（現在の左京区役所の住所）から出発し、9年ほど前に開業した京福電車に乗った。下車後の周恩来が渡月橋を渡り、40分ほど歩いた目の前の景観に震撼



大悲閣千光寺参道入り口 撮影：孔鑫梓

した。山水に囲まれた道の突き当りが、大悲閣千光寺参道の入り口に通じていた。その風景をリアルに「雨中嵐山」に描かせている。「突見一山高（道の尽きるやひとときわ高き山見ゆ）」になり、参道入り口の右手に「流出泉水緑如許（流れ出る泉は緑に映え）」、「繞石照人（石をめぐりて人を照らす）」のである。その風景は今も変わっていない。



詩の中の風景：流れ出る泉は緑に映え 石をめぐりて人を照らす（王敏撮影）

二、周恩来を導いた日本の禹

1、亀山公園の角倉了以銅像

嵐山一帯は1910年ごろに二つの公園を開き、左岸を嵐山公園、右岸を亀山公園とした。この公園を開いたことにより観光客が絶えず、古今を通じた観光業を支えた。山紫水明、春は桜、秋は紅葉と、「京



（王敏撮影）

都郊外第一の観光名所」と称されている。亀山公園の南口近くに、日本の禹（中

国古代の治水帝王)と称された水運家である角倉了以すみのくらりょういの銅像が立っている。この銅像は1912年に建造された。銅像は第二次大戦時に供出されたが、1988年に新たに建造された。建造年代が異なるが、角倉了以の銅像は40年前に建立した周恩来の詩碑とは鼻と目の間のところで向かい合って相唱和されているようである。

井上穎纘(1969)の「亀岡盆地における大堰川流路変遷の復原」(『人文地理』第21巻6号pp.91-100)、武藤信夫・佐藤陽一(2002)の「角倉了以・素庵一世界に先駆け、経営倫理を実践」(『日本経営倫理学会誌』第9号pp.115-123)の記述によると、日本と明朝は勘合貿易(明王朝が認めた正式な貿易船)が持続され、戦争などの動乱により一度は中断してしまい、豊臣秀吉の天下統一後の1592年(文禄元年)再度動き出した。この動きと世界情勢が顕著に関連するようになったのは、十六世紀半ば、世界は大航海時代に突入したためであった。ところが日本は世界通商へ熟することなく鎖国へと突き進む。その直前、江戸時代初期のわずかの時間、制限を受けつつも航海時代の潮流に乗ろうとした者がいた。京出身の角倉了以である。十七回の海外通商を積み、巨万の富を蓄えた。

角倉了以(1554-1614)、医者の家系に生まれた。祖父は一代で身を起こし、角倉家は医業以外にも商売を兼業することとなった。1592年、了以は海洋貿易に身を投じ、豊臣秀吉(1536-1598)や徳川家康(1542-1616)の発行した朱印状を手に入れた。朱印船貿易という開運の寵児となった。瞬く間に豪商のトップへ駆けあがった。1605年(慶長10年)、了以は京都西部を流れる大堰川の上流の保津川の開削を行い、6カ月という短期間で30kmの運河を開通し、世間を驚かせた。前例のない奇跡を生みだした精神は中国から伝わった治水の神「禹王」に学んだといわれる。

『前橋旧蔵聞書・六』などの資料によると、禹に倣い、角倉了以は終日手に斧を持ち、民工と共に開削現場にて奮闘した。開削後、了以は水上運輸事業の技術者の家族たちを開墾地に定住させたのが今日の京都市右京区である。了以の偉業を記念した嵯峨天龍寺角倉町という地名が今も存在されている。

あの時代、「朱印船」とは当局・幕府が発行した「海外渡航許可証」を有する木造船を指す。航海ルートは江戸時代だと長崎県の平戸、長崎を基地にし

て、大陸や東南アジアとの間を往来した。マカオ、安南（ベトナム）、シャム（タイ）やマレー半島などと通商しマラッカ海峡も航海した。日本は当時、世界で有数の銀産出国であり、銀を使った貿易は国力を増強できた。角倉了以は「窮則独善其見、富則兼濟天下」の理念を掲げ、アジア全域との海運貿易で得た巨額の利益を国内の水運路の開削に投じた。



朱印船貿易航海路線

(<https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/7/76/JapaneseTrade17thCentury.jpg>)

幕府は保津川開削の実績を評価して、了以に富士川、高瀬川を相次ぎ開削させた。晩年の了以が手がけた天竜川の開削工事は途中でやむを得ず中止せざるえなかったが、これは、長年の疲労が重なり、志半ばでこの世を去ったからである。享年 61 歳である。

晩年の了以は、水運事業に献身し命を失った農夫たちの供養を怠らなかったという。本人は死後、利水事業を見守るかのように建つ大悲閣千光寺に葬られた。長男の素案（1571 - 1632）が、石割斧を持った了以の像を寄進した。災害にあったため墓は近くの二尊院に移され、妻子や子孫たちと共に眠っている。

その前の 1611 年（慶長 16 年）、角倉了以は独占した朱印状貿易を長男の素案に譲り、貿易事業の第一線から退いた。継いだ素案は貿易だけでなく、親と同様、水利土木事業にも関わり、河川流域の開発に力を注いだ。淀川通船輸送管理者や巨材採運使、近江国坂田郡代官にも任命された。また、日本儒学の先駆者であり大家でもある藤原惺窩に師事し、書道家・画家の本阿弥光悦と親交して嵯峨本を共同出版した。書道の角倉流を創設し、文化や芸術史上において重要な貢献をした。

大辞泉にて「嵯峨本」の「嵯峨」は京都の西郊一帯を指しており、「本」は本阿弥光悦と角倉素案らが共同刊行した木製活字版本であると解説されてい

る。雅びな意匠を施した日本式豪華版を誕生させたのである。

ともあれ、1606年に成功した嵐山の大堰川疎通の開発は角倉了以を嵐山と確固たる絆で結ばせた。

2、大悲閣千光寺と隠元

本来、大悲閣千光寺は第88代後嵯峨天皇（1220 - 1272）の祈祷所であり、もとは右京区の清涼寺の西方中院にあった。大悲閣の由来は本尊の観音様の仏堂「観音堂」より来ている。江戸初期の1614年（慶長19年）に角倉了以が大堰川を開削する工事で亡くなった人々を弔うために、大悲閣千光寺を清涼寺から、大堰川沿いの保津峡の絶壁の上に移転させた。そこから遠くまで見渡せ、疎通後の河川を眺めることができるから。晩年の角倉了以は大悲閣千光寺で修行に明け暮れ、事業のため犠牲となった多くの人々の魂の安息を祈った。

1614年、角倉了以がこの世を去る前、二尊院の道空了椿を請じて大悲閣千光寺の中興の開山とした。了以が大悲閣に、石斧をもって治水を指揮した禹の木像を安置したことに倣い、息子の素案は寺内に了以の木像を安置した。1630年、儒学家の林羅山（1583 - 1657）が撰文した「河道主事嵯峨吉田（角倉）了以翁碑銘」という記念碑が建てられた。

日本における禹王信仰は伝承されてきたが、明治維新を境に西洋価値の優位が大勢となり、千光寺は衰退の道をたどった。大悲閣の仏堂や院が凋落していった。また、1959年の伊勢湾台風により大きな被害を被った。幸いに住職たちの堅忍不拔な努力で、寺はどうか苦難を堪えることができ、2012年にようやく全面的修復が完了し、参詣者が多く訪れるようになった。

記紀によると、六世紀に朝鮮半島経由で仏教が日本に入った。現在、その仏教を代表する宗派が13もある。その内、禅宗がさらに三つに分かれている。臨済宗、曹洞宗、黄檗宗である。大悲閣千光寺は本来天台宗であり、1808年に黄檗宗に改宗し、山号を嵐山として寺号の総称が大悲閣千光寺である。

黄檗宗は臨済宗と曹洞宗に比べれば規模が下回る。本山は京都府南部の宇治市にある万福寺（山号は黄檗山）、開山始祖は1654年に請われて渡来した中国福建省出身のいんげんりゅうき隠元隆琦（1592 - 1673）である。隠元以来13代までは明と清の渡来僧が住持を継続した。臨済宗・黄檗宗のホームページによれば、現在、



黄檗宗のシンボル・大悲閣千光寺の木魚（王敏撮影）

全国に 15 派の本山と 7000 もの末寺があるという。日本では明治の一時期、黄檗宗は臨済宗に吸収された。

隠元は 1592 年 11 月 4 日に福州府福清県万安郷靈得里東林の林家に生れた。1620 年、故郷の黄檗山万福寺で出家し、法号は隠元、法名は隆琦とした。その後、各地を遍参して臨済宗第三十二代の直系人となった。1660 年、山城国宇治郡大和田に幕府から寺地を賜り、1661 年に大陸故郷と同名の黄檗山万福寺を開創した。文人でもあった後水尾法皇（1596 - 1680）の帰依に恵まれたうえ、徳川幕府 4 代将軍徳川家綱（1641 - 1680）の庇護を受け、1663 年 1 月 15 日祝国開堂をしてから、1664 年 9 月に松隠堂に退隠したが、1673 年 4 月 1 日、後水尾法皇から大光普照国師号を下賜され、4 月 3 日、82 歳で逝去した。

隠元が明代の先進な技術、建築、園芸、料理、文学、医学、煎茶等を伝道して、日本の社会一新を牽引した。この社会現象を「黄檗文化」と称された。隠元も余生を心安らに日本に託した。

隠元に帰依したほかの皇族をあげれば、圓光院文英夫人（生没年不詳）、後西天皇（1654 - 1663）、緋宮光子内親王（1634 - 1727）らがいるので、皇室より幾度も諡号¹を賜ったのが隠元である。

¹ 林観潮（2010）。『隠元隆琦禅師』。厦門大学出版社，pp141

1673年4月2日、後水尾天皇より大光普照国師

1722年、霊元上皇より佛慈広鑑国師

1772年、後桜町上皇より径山首出国師

1917年、大正天皇より真空大師

1972年、昭和天皇より華光大師

また武家をみれば、家綱將軍のほか、老中の酒井忠勝（1587 - 1662）、大名の板倉重宗（1586 - 1656）、松平信綱（1596 - 1662）、²京都所司代の牧野親成らが帰依した。大悲閣千光寺は、隠元の題辭額「普門瑞現」を本堂に掲げている。



寒天撮影

3、高泉性激の詩碑

大悲閣千光寺に向かう参道には200段の石階段があることは述べた。参道入り口の両脇には花崗岩の石碑が構えてある。高さ226cm、幅39cm、厚さ29cmもの石碑に、隠元禪師の弟子高泉性激の詩「登千光寺」が刻まれている。

千尺悬崖构梵宮，
下临天地一溪通。
何人治水功如禹，
古碣高镌了以翁。

日本語訳・千光寺に登る

千尺の懸崖、梵宮を構かまえたり
下に地の無きを臨めば一谿いっけい通ず
何人の治水、功は禹の如くたらんや

² 林観潮（2010）．『隠元隆琦禪師』．厦門大学出版社，pp143

古碯は高らかに鐫ほる了以翁

<https://office34.exblog.jp/15069950/>

原詩が黄檗文化研究所の『高泉全集』編纂委員会編集、黄檗山萬福寺文華殿から2014年3月刊行の4巻本『高泉全集』Ⅱ詩文集篇 第2巻第689ページに収められている。「佛国詩偈」に分類分けされている。高泉の年譜によると、1678年に高泉が門弟の雷洲が開創した佛国寺の開山となり、佛国寺（現在の伏見区大亀谷敦賀町仏国寺）の住持を一時務めた。これは推定でしかないが、この詩を詠んだ時期は1678年より以後といえよう。

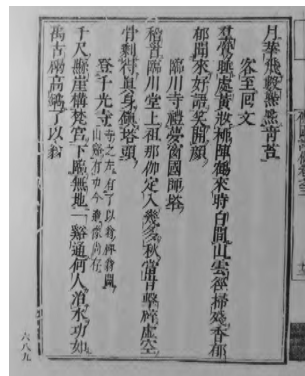


1978年再建当時の大悲閣千光寺
(写真提供：大悲閣千光寺)



大悲閣千光寺の大林道忠住職と筆者
(2020年2月19日撮影)

詩題と詩文との間に2行にわたり「寺之左有了以翁碑翁關山谿有功今造像尚存」とある。「了以翁」は角倉了以を指し、「了以翁碑」は儒家の大家である林羅山（1538 - 1657）が撰文した「河道主事嵯峨吉田（角倉）了以翁碑銘」の石碑を指している。石碑の高さはおよそ2メートル、幅0.9メートルであり、左上の角が破損している。碑文は2000文字余りであり、文中の個別の文字がはっきりとせず、識別がしづらい。伊東宗裕編『林羅山文集』509から512ページに収録されている。碑文の内容は以下のアドレスから調べられる。www.kinsei-izen.com/images/26_Kyoto/Ryoui-hime.pdf



その中で特に碑文の最後を飾る林羅山の詩で

ある。

慕其賜玄圭兮 笑彼化黃熊

(慕ヒテ其賜フコトラ玄圭ヲ兮、笑フ彼ノ化スルヲ黃熊ニ)

黄熊とは治水のため、黄熊になった禹の父鯀の物語を指した。

つまり、高泉が寺院の歴史的由来などを把握している。林羅山の才能と角倉了以の精神を深く理解したうえで、「登千光寺」を詠んだと推察する。よって、詩の中で、林羅山の碑文に應對して、禹と角倉了以を同格に論じている。

「何人治水功如禹、古碣高鐫了以翁（何人の治水、功は禹の如くたらんや古碣は高らかに鐫ほる了以翁）」

これは林羅山に対する唱和であり、また了以に対する称賛でもある。

高泉性激は、また黄檗高泉（1633 - 1695）とも称される。福建省福清市出身の黄檗宗の僧である。1661年、29歳の高泉は隠元の招請を受け、京都の黄檗山萬福寺に入寺する。『妙法蓮華經』ほか30余巻を血書している。1692年に萬福寺の第5代住持に就いた。靈元上皇より1705年に大圓広慧国師、1727年には仏知常照国師に諡号を送られている。後世では高泉は黄檗山中興の祖として祀った。世寿63歳。

大悲閣千光寺は1808年より黄檗宗に改宗となった。黄檗宗の高泉の存在とは無関係ではないと推察する。

三、禹と角倉了以に注目する理由

「雨中嵐山」に見る逍遙に至る理由について探したい。

1、治水の家の歴史

周恩来の母の万冬爾（1877 - 1907）は江西省南昌県人。その父は清河县（現淮陰県）の県知事兼水利担当の官僚であった。1897年、20歳になった万冬爾は周劭綱に嫁いだ。3人の男子を生み、彼女が最も愛したのが長男の周恩来であった。しかし周恩来が1歳になる前に、父母は子供のいない叔父夫婦の養

子にした。1904年周恩来が6歳の時、養父が逝去。養母と実の両親と共に母方の祖父の家がある清河県に移動し、祖父の家の私塾で勉強をした。

楊天石、章百家らが推薦する2017年九州出版社から出版された李海文の著作『周恩来家世』によると、周恩来の母方の祖父である万青選は、淮安府県に赴任されると水利の「里河同知」を受け持った。後に徐州府の「運河同知」も受け持ち、治水の水利専門家であった。周恩来の姪である周秉宜女史は筆者にこう話してくれた。万青選の長男もまた水利に詳しく、万家は3代にわたり、治水に関係したのである。このため、家庭生活にも出てくる水文化関連の知識や話題が必然的に周恩来の耳に入り、水に関する教養が培われた。

2、祖先祭祀習俗

周恩来出生の地は今日の浙江省淮安市である。祖籍は近くの町、浙江省紹興市である。紹興は紹興酒の産地以外に、大書道家である王羲之（303 - 361）や作家の魯迅（1881 - 1936）、教育者の蔡元培（1868 - 1940）の著名人を生んだ地である。史伝にある治水賢王たる大禹陵など、40余りの禹の活動遺跡や史跡もまた紹興が発生源となる。紀元前210年より秦の始皇帝が禹を祭って以来、歴代の王がその伝統を受け、遵守してきた。960年、宋王朝の宋の太祖が大禹を国家式典にした。民国時代、さらに禹を祭る位置づけを「国祭」とし、



会稽山图(摹自康熙《会稽县志》，卷首)

毎年9月19日は国を挙げての祭祀である。清康熙13年（1674年）発刊の地方誌【会稽県誌】28巻刻本（「清」呂化龍修 董欽徳纂）の巻首にある大禹陵の地図が往時の位置づけを語ってくれている。

続いて空撮による大禹陵を、川の右側にある古建築群をみていただきたい。



（紹興日報社 袁雲撮影）

禹の聖地ともいえる紹興に相応しく、今も四十数か所の禹ゆかりの旧跡名所があるという。その一部を邱志榮監修『中国鑑湖』第5期（中国文史出版社 2018年）に掲載されたものを挙げておく。

紹興禹跡・覽表		
分類	名称	所在地
廟宇	大禹廟	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟	会稽山麓、大禹陵南
碑刻	大禹廟碑	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟碑	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟碑	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟碑	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟碑	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟碑	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟碑	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟碑	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟碑	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟碑	会稽山麓、大禹陵南
園林	大禹廟園	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟園	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟園	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟園	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟園	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟園	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟園	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟園	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟園	会稽山麓、大禹陵南
	大禹廟園	会稽山麓、大禹陵南



紹興と禹の歴史的淵源は魯迅と関連した一枚の写真からも窺い知ることができる。これは1911年の早春、魯迅と紹興府中学堂の教員と同級生らと大禹陵に参拝した時の写真である。地元にとって、大禹陵を参拝することは古今の大切な行事である。



幼少より禹文化の薫陶を受けた周恩来が日本から帰国して20年たった1939年3月30日朝、親戚友人と共に大禹陵へ参拝した。言うまでもなく、まもなく迎える4月5日の清明節を意識したから。

当時の記念写真（二枚）が紹興周恩来祖居記念館より提供されている。



3、清明節と「雨」

中国の暦で4月5日は清明節とされる。

1919年4月5日の嵐山は雨である。中国人にとって、清明の日の雨は先祖祭祀時の涙雨とされる。その理由は唐代詩人の杜牧の名詩「清明」に由来する。

清明時節雨紛紛
路上行人欲斷魂
借問酒家何處在
牧童遙指杏花村

書き下し文

清明の時節雨粉粉
路上の行人魂を斷たんと欲す
借問す酒家何れの處にか在る
牧童遙かに指さす杏花の村

(「漢詩 書き下し文 現代語訳」より <http://sekiso.blog.jp/archives/1759067.html>)

偶然かもしれない。その身が日本にあった周恩来は清明節の先祖祭祀の時期を迎える心情になった。「清明時節雨紛紛」(清明の時節 雨ふんぶん)の中を、日本の禹・角倉了以の銅像が閃き、周恩来を「雨中二次遊嵐山」の決行を誘ったとしか思えない。

ところが、1919年の清明節は1日ずれて4月6日である。

<https://zhidao.baidu.com/question/1734974743965851667.html>BaiDu 知道網にある記載より、1901年から1943年の間、「清明」がずれて4月6日になる現象が数回あった。だが、このような特殊な自然現象を周恩来は知らないでいた可能性がある。あるいは知っていながらも「清明時節雨紛紛」という天道さまの計らいを見逃さず、例年通りの暦にそって先祖祭祀を行ったかもしれない。

記録によれば、1919年の4月6日は周恩来が新中学会³の8名の会員と京都懇談をしている。会員は京都帝国大学で学んでいる安体誠⁴と于樹徳⁵、東京の馬洗凡⁶と童冠賢⁷及び、東京水産講習所卒業の楊扶清⁸と張子倫⁹らである。周恩来の送別会でもある集いの記念写真に4月6日の日付が記されてある。



写真は左より 輔青（楊扶清）、永滋（于樹徳）、翔宇（周恩来）、東美（劉東美）
洗凡（馬汝駿）、冠賢（童冠賢）、子倫（張国経）、朴岩（黄開山）、存齋（安体誠）

- 3 新中学会は1917年7月東京水産学校の楊扶清と張国経、留学生で元南開中学の馬洗凡、童冠賢、高仁山、劉東美、陳鉄卿、楊伯安、そして法政大学の李峰、黄開山などが東京にて共同で留学生団体を立ち上げた。新中学会は「赤心」をエンブレムとし、感情を伝え、品行を研ぎ、学術を解き明かし、科学的方法を運用して中国を發展させることを宗旨とする。
- 4 安体誠（1896 - 1927）河北省豊潤県人。1917年京都帝国大学経済学部に入學し、東京新中学会会員となった。1921年に帰国し、1927年上海竜華監獄にて犠牲となった。
- 5 于樹徳（1894 - 1982）天津市静海県人。1917年京都帝国大学に入學し、東京新中学会会員となる。1921年に帰国し、後に李大剣と共に戦う。新中国成立後、第1から6回までの全国政協委員となり、第5、第6回全国政協常務委員となる。1982年病没す。
- 6 馬洗凡（1892 - 1946）河北省昌黎県人。新中学会創設メンバーの一人。1946年病没す。
- 7 童冠賢（1894 - 1981）河北省陽原県人。新中学会創設メンバーの一人。1926年帰国し、1948年立法院長に任じられる。1981年カナダにて病没す。
- 8 楊扶清（1891 - 1978）河北省楽亭県人。1951年に来日し、1920年に帰国。実業救国を施行し、解放後は水産部副部長に任じられ、全国人民代表でもあった。
- 9 張子倫（1894 - 1959）河北省楽亭県人。1915年に来日し、1920年に帰国。楊扶清と共に新中罐食品工場を設立する。

4、中学の作文に書き留めた禹

周恩来が南開中学に在籍時に、3回ほど作文の中で禹に触れた。この3篇の作文を含めて2014年、人民出版社より中共中央文献研究室第二編研部と天津南開中学の編集した『周恩来南開中学論説文集』が出版されている。相関内容の原文に簡単な解説を付けて紹介しておく。

① 1914年秋の作文「生人最宝貴者、無過于光陰」

「大禹惜寸、陶侃惜分、視光陰之可貴、在昔已然。」¹⁰

陶侃は東晋の名将であり、常に諭されるのは「禹のような聖人でも一寸の光陰を惜しんだ。我々のような凡人は更に光陰を惜しむべきである。放逸して遊び、光陰を浪費できるものだろうか」と。このような光陰を惜しむことは古来よりあったという。

② 1916年5月6日の作文「誠能動物論」

「下車泣過、大禹之誠感罪、禱雨桑林、商湯之誠格上天」¹¹

ここで述べていることは大王が一度車に乗り巡查しに外に出た時に、一人の護送された罪人と出会い、禹が車から下り何かと聞きに行く場面である。本来この罪人は悪事を働き罰を受けるのである。禹は事情を聴いた後に不覚にも涙を落とす。周りの人々は「この犯罪人は法令を守らなかったから、その罪は受けるべきものです。何か痛惜するものがありますか。」と聞いた。禹は「堯舜の時代は、天下の人は皆本分を守っており、悪事を働き罰を受けたということは聞いたことがなかった。ところが今、私の執政は人に徳を為さず、犯罪人は民である。それは私の不徳の致すところである。」と答えた。禹は側にいるものに亀の甲羅を1枚取り出すようすぐに命じた。そしてその上にこう記した。「百姓有罪、在于一人」。

商（殷）を開国した成湯は夏を滅ぼしたが、大旱魃に見舞われ、五年間で作物を収穫できなかった。成湯は自ら桑の林の中で雨乞いを行った。その際、

¹⁰ 中共中央文献研究室第二編研部と天津南開中学編集（2014）.『周恩来南開中学論説文集』.人民出版社, 37-38pp

¹¹ 前掲書、p.166

成湯はこう天に伝えた。「私一人に罪があり、民を巻き添えにしないでもらいたい。もし民に罪があるのならば、私一人がそれを担おう。」ほどなくして天から慈雨が降ったという。

③ 1916年10月の作文「我之人格観」

「禹、湯、文、武以之鳴于政綱」¹²

「大禹下車泣盜、商湯祈雨桑林、是聖人以背于正道、而引以為良心未安」¹³

まずここで述べていることは大人物についてであり、彼らの生存は人類に非常に重要である。即ち彼らが常道（正道）であるからだ。禹、商湯、周の文王と武王はそれを政綱に体现している。

次に述べていることは禹が車から下り罪人について泣き、商の成湯が桑林で雨乞いを行った。これは彼ら偉人が正道に矛盾を感じる故に、良心が安定していないことである。

以上に取り上げられた事例を、知識面に限った認識としても理解できるものの、禹の言行の波及する方向性に注目すれば、「地平天成」という理想に帰一する軌道がのぞかれる。恐らく少年時代の周恩来が統治者たる姿勢と統治結果に関心を寄せていただろう。それを禹というモデルケースから、「地平天成」に達する手法、精神と実践を教わったからだろう。わかりやすく言えば、平和のためのガバナンスを諭されたと思える。

四、「一点の光明」とは

大悲閣千光寺に入ると、「日本の禹」・角倉了以の木像が正殿の中に奉納されており、日本屈指の儒家・林羅山に揮毫された記念碑文がある。この二人のほかに隠元の弟子・高泉を見逃せない。それを反映した高泉の詩が寺院参道入り口の両脇石碑に篆刻されている。どうやらこれらの人物が一体となつてつながり、結果的に大悲閣千光寺に集中する。そこから日中混成文化のパワーが、力強く放射し出されている。周恩来の胸に溢れた歴史文化の知を必然的

¹² 前掲書、p. 204

¹³ 前掲書、p. 206

に誘発したのであろう。また、禹を介する故郷と祖国への思いを自然に引き起こしたと想定される。同時に日本への親近感と認識を今一度、縦横に深化させたに違いない。

この角度から考えられるに、周恩来は嵐山で出会った人、物、事に接して感慨を深め、本能的に日本での考察記憶を整理したくなっただろう。そこで中日間の特殊な歴史文化関係に気づき、両国共有の結び目の素材（禹、隠元、高泉など）に目をかけることになるだろう。この線で思索の通路をたどっていくと、習俗など生活面に集中された共有の原点にそう難しくなく辿り着いた。即ち、同じ漢字を使い、同じ漢文を読む両国民には、教養体系も価値標準も起源に合流できる。禹信仰が日本に根を下ろし、日本の生活面と精神面に浸透した身近な事例ではないか。角倉了以が禹精神をもって、事業展開に成功したうえ、科学と経済の力で国富民強の可能性を論じた。これは救国の志を胸に秘めた周恩来にとって、貴重な参照枠として受け止めたに違いない。

古今、日中間の間では表現（漢字）の障害が少ないため、相互刺激、相互発展を可能にした現象がほかにも多くあげられる。どれも漢字文明圏内の相互の融合と作用から出来上がった必然の結果を反映している。しかし、禹から角倉了以へ、そして若き周恩来に至る啓発型の精神リレーが、日中交流史



琵琶湖疎水第一トンネル。周恩来が1919年4月に考察したと思われる



臨濟宗・南禅寺内にある琵琶湖疎水・用水路(明治中ごろ 1890年)(王敏撮影)

においても極めて象徴性が強い。

この発想に従うと、1971年1月29日に周恩来が人民大会堂で日本卓球協会の後藤鉦二会長一行と会見した際に語った内容について、新しい認識と解釈を与えることができよう。

「私は帰国前に京都に1か月ほど逗留しました。船に乗り洞窟を通り抜け、琵琶湖に行きました。琵琶湖は大変美しいですね。」¹⁴

琵琶湖の魅力は、近江八景によく集約される。中国の洞庭湖の瀟湘(しょうしょう)八景にならったことは知られる。周恩来が琵琶湖行きを選択したのには、話が数十年隔てて再度及び、あの山水の美しさから見て十分にわかる。しかし深く探求するのであれば琵琶湖行きを選択した深層にはさぞ意図があるろう。

まず、周恩来に言われた琵琶湖の「洞窟」とは、1912年に完成した琵琶湖疎水のトンネルを指したと思われる。比叡山系(最高標高848メートル)を掘

¹⁴ (1993).『周恩来外交活動大事記(1949-1975)』.世界知識出版社, pp. 145 - 146, pp. 577 - 578

削して全長18キロ、幅6.4～11.5メートル、水深1.7メートルのトンネルで、琵琶湖の澄んだ水を京都に引いた。日本人だけで近代工法によるトンネル掘削技術を駆使して12年越しで貫通させた画期的土木事業であった。周恩来が「洞窟」を通ったのは完成して7年もたっていないところで、日本人の自助による近代工法の「疎通」工事であり、貴重な体験であったことは間違いない。

たぶん、琵琶湖行きは嵐山逍遥へ連結すると推しはかられる。なぜなら角倉了以が晩年に琵琶湖開発を企画したことが想起される。琵琶湖開発をも角倉了以なりの禹精神の実践の一環と理解されよう、周恩来が関連資料を調べたのではないか。

では、周恩来はどうやって角倉了以の秘めた琵琶湖開発構想にたどり着いたのであろうか。この問題に対しては更に考察が必要であるが、今は二つの可能性を挙げられる。第一、現代人の観光客と同じく、若く力がみなぎっていた周恩来は可能な限り歴史の名所を訪れようと考え、隠元が開山し、高泉が第5代住持に任ぜられた万福寺や角倉了以が暮らしたことのある嵯峨旧居などに足を運ぶことを想像される。これは事実となれば、行く先々から角倉了以関係の諸資料を手に入れられることになる。

第二、1897年の明治30年に発行された代表的少年雑誌『少年世界』の中に、角倉了以の伝記「治水長者」が掲載されている。角倉了以が当時も手本とされているため、図書館などで相関する書物が読まれるはずである。広く読書する意識を持つ周恩来が見逃されないと思われる。

要は嵐山に点在される人物の角倉了以、禹、隠元、高泉等の痕跡に、日中共有の歴史文化の要素が潜在してある。それは角倉了以という日本人の実践によって、鮮明に浮き彫りにされてくる。このところに敏感に反応したのは周恩来であり、嵐山の次に琵琶湖疎水探訪に乗り出した誘因である。言い換えれば、「一点の光明」を確認しつつ探求して止めない行動の連鎖であろう。

「一点の光明」とは、救国のための啓示を得られたことを意味する。中国では、民を救済した先駆者が治水の禹である。禹の治水により得られた天下太平、つまり「平和」を理想とするのが中国人の教養範囲とされる。ところが、禹の「ガバナンス」を異邦で実現した角倉了以の事例が刺激的だけではなく、中国と中国人のための参考になると、周恩来が気づいたろう。角倉了以の銅像の前

に立って、禹と重ねて彷彿する周恩来の若き姿が目には浮かんでくる。

五、周恩来と禹の「疎通」という方法論

1、対日民間外交のヒント

以上の概略を基に考察を進めれば、周恩来が角倉了以をめぐる日中の融合混成関係に対する認識の深化が嵐山を重要な背景にしたと考察できる。これは治国の参考素材を見つけたい周恩来の2度も嵐山を逍遙した動機でもあろう。

周恩来と禹精神の緊密な結びつきは疑う余地もないほど深いものである。新中国建国後の話になるが、外交だけでなく内政の総指揮する総理として、周恩来は治水のために四方に奔走し農業生産力を高めようとした。全国の貯水池の建設そして淮河や黄河の整備し、長江を利用し、雄大な水利事業を計画、推進した。これらは日本の禹・角倉了以の事業にも刺激されたことと無縁ではない。

『周恩来年譜』の中に、2篇の禹に関する論述がある。なお、この本は力平・馬芷蓀が中心となり、中共中央文献研究室編纂した。1989—1949と1949—1976という二つに分かれた内容になっている。中央文献出版社と人民出版社から1989年3月、そして1997年6月に出版されている。前半の一部が1998年2月に修訂本が出版された。67万字である。後半部分は上中下の3巻に分かれており、合わせて156万字である。つぎの記録を見よう。

1.1946年11月30日（『周恩来年譜』電子版、433p）

周恩来は各解放区の水利聯席會議の代表と接見した時に、「大禹治水、三過家門而不入（治水のため、家を三度も通り過ぎた）」の故事を用いた。

2. 1950年8月24日（『周恩来年譜』電子版、459p）

中華全国第一回自然科学工作者代表會議にて「建設と団結」をテーマにした報告がなされた。「大禹の治水は中華民族のためになった福利であり、中国科学者の努力は大禹よりもさらに大きな功績をきっと創り出すであろう。」

少年時代の周恩来が禹の存在と意味に対して深く意識したとしたら、総理となった周恩来は禹を文明の開拓者や科学の先駆者と定義づけ、新中国建設に必要な精神的象徴と、国を治め政治を行う際の参考としたといえる。

嵐山を逍遙した見聞を加えて、周恩来は、禹と角倉了以の共通手法「疎通」について認識を一層深めたと想像できる。角倉了以が禹の「疎通」を基本にした治水を、異国の日本に活用して成功したから、「疎通」の方法論を有効に生かせようと、内外に有用の「疎通」の可能性を見抜いたのが青年周恩来である。

「疎通」に気がかりの周恩来は1939年、江蘇省紹興に帰郷した際、次のように語った。

「抗日戦争中、我々は禹とその故郷の英雄である勾踐から、彼らの忍耐と苦勞、そして奮闘する精神を学ばなければならない」

「人と自然の対立において、禹は先駆者である。科学が発芽する時代、自然に勝つことは絶対的に容易いことである。中国の歴代統治者は治水の方法を掌握しておらず、誘導の方法ではなく、圧迫する方法しか採らなかった。そのため独裁者は反乱を必ず受けて、失敗する」

新中国建国後、周恩来は「疎通」から得られたヒントを対日外交に活用したともいえる。敵対関係を変えていくのに「疎通」が必須であり、中日両国間を「疎通」するには、少なくとも初期段階では、民間を主体とする外交の過程が要する。

なぜ民間なのか、日中両国の結び目・漢字の共有などを絡んで考えていけば、民間には共感、共鳴可能の教養の素地があることが、周恩来が自ら日本の生活を体験し、嵐山などを考察して会得したから。民間の可能性にかけた判断をされる際、周恩来の脳裏に角倉了以と隠元、高泉そして嵐山、東京、日本への思いが霞んでいたかもしれない。いずれにせよ、嵐山で得られた「一点光明」の刺激が、後の対日外交の参考素材となり、疎通というヒントが民間を主体とする外交通路の打開に応用させただろう。

よって、建国間もない1953年9月28日、周恩来が新中国を訪問した最初の日本要人、日本平和擁護委員会委員長大山郁夫に丁重に決意を語った。

「われわれは、世界各国との正常な関係、とくに日本との正常な関係の回復を主張しています」

当時のことにつき、世界知識出版社より1955年に発刊した『日本問題文件

滙編』に「周恩来总理接見大山郁夫并就中日关系发表谈话」という記録にされており、116-118 ページを参照願う。この言葉は日本体験が基になった周恩来の信念の具現化であり、対日民間外交の幕上げと理解できる。

2、対日民間外交の実践

前述してきたように、留日での見聞がもともなったのであろう、周恩来は日本の民間の力につねに注目して、建国後は政府間ではなく民間外交を主導した。この選択をした当時の国際情勢的背景には、第2次大戦からまもなくであり、国共内戦をまだ戦っている最中の1949年前夜の新中国は、世界では孤立した状態にあり、国際地位を固めることが急務であった。新中国の成立前後はまだ社会主義勢力は弱体であり、建国間もなく1950年、朝鮮戦争が勃発して東アジアにも冷戦が燃え盛り、アメリカは「台湾地位未定論」を打ち出した。さらにアメリカは対日講和条約を急ぎ、日本を反共同盟国として早期の単独講和をめざした。対社会主義国家に対する戦略物資と技術を制限し、ソ連に対しては鉄のカーテン、中国に対しては竹のカーテンによって封じ込めんとした。

1951年サンフランシスコにて会議が開かれ、アメリカが中国を排除した日本国との平和条約の話し合いの他、中国はサンフランシスコ講和条約会議に未参加であった。これに対し、周恩来は中国政府を代表しサンフランシスコ講和条約を決して承認しないと声明を発表した。さらに台湾当局は日本と締結した「政党地位」獲得のため、講和を認めた。そして1952年4月、台湾当局は日本と「日台平和条約」を調印した。

この時期、国際情勢は戦後の日本を再浮上させ、中国外交の対象を日本に向けるようしたてられた一因でもあると言える。

朝鮮戦争停戦後、周恩来は国際情勢が相対的に緩和した時期を鋭くつかみ、大きく和平政策を促進させ、中国外交の新局面を打ち開いた。中でも国家間関係の平和五原則を提案し、インド、ミャンマーの両総理と共同提唱し、五原則を国際関係の普遍的規範と定めた。

1956年末から1964年初めまで、周恩来は3度に分けてアジア・アフリカの28カ国を訪問し、友好協力関係をうち建て、発展させ、深い結びつきをつくった。これと同時に、先進資本主義国家に打ち建て発展した関係の道を積極的

に求めた。日本に対しても、「先進資本主義」と位置づけした。

1980年、中央文献出版社が発行し、中国外交部・中央文献研究室所編集の『周恩来外交文選』の中に関連する内容が触れられていた。例えば、第一回中国駐外使節会議上での発言が「我们的外交方針和任务」（1952年4月30日）に収められており、日本に関係するところを抜粋してみよう。

「我々は世界各国の人民と団結し、兄弟国家の人民だけでなく、植民地であった、または半植民地であった国と資本主義国家の人民をも、引き入れていく。しかし外交業務では、国家間の関係が対象となる。外交は国家間の関係を通じた関係で進行していく。だがスタンスはいまだ人民に影響や獲得することであり、弁証法的である。

我が国とすでに国交を結んだ東南アジア国家は、過去に植民地であったが、現在形式をすでに変えただけでなく、自己の国会と政府を有し、同時に人民の覚醒により帝国主義が植民地に対する方法を変えざるを得なくなった。そして現地の資産階級による統治が行われた。このような状況下で、もし現在まだある人があの国は植民地であるということは、まったくもって現実にそぐわないことである。例えば現在の日本もアメリカの植民地であるとは言えない。日本国民の主な闘争対象は、時にアメリカ帝国主義であったり、時に日本政府であったりする。帝国主義による直接統治こそが植民地である。東南アジア国家は戦争と和平問題において帝国主義とは矛盾を生ずる。我々は戦争時に彼らが中立であることを取り、和平時は彼らが帝国主義と距離を取るよう引き込む」

当時国内外の情勢の必要により、民間外交の実践は、理論を先行した。周恩来は長期にわたり、現場指導に力を入れ、民間外交の思想をまとめて論じる余裕がなかったと察する。突破口の最初は経済と貿易の交流を主とした。こんな事実が知られている。

1952年の春、モスクワ国際経済会議招集の前に、周恩来は日本が会議に参加する情報を知り、直ちに中国代表団団長である南漢宸を中国人民銀行総裁に配置し、日本側と接触した。3月15日に出発する中国代表団責任者に会って

言付けし、中国側が自発的に日本側を招き、参加者と交流する際には、日本側に訪中するよう招待するようにと言った。このため1952年5月に、高良とみ、帆足計と宮腰喜助の3名が北京を訪問し、6月に中日貿易協定を締結した。これは新中国が迎えた戦後第一陣の日本の客人であった。中日間の署名の戦後第一陣は中日民間貿易協定であった。

1953年9月、日本の国会は中日民間貿易を促進する決議を通した。10月、中国貿易促進委員会は日本の国会議員に中日貿易連盟代表団が北京で「中日貿易協議」に調印するよう促進した。その目的は「中日両国間の貿易を展開し、中日両国民の友好を強める」ことであった。同時期に第2回民間貿易協定を締結した。ここから、中日間の貿易関係は「人民間貿易」の方式を以て回復していった。中日民間貿易のルートは円滑に向かい、日本の各界の名士が続々と中国にやってきた。同年、中国在留日本人帰国送還の計画が動き出した。

1954年、日本の戦犯を特赦した。周総理は日本文化学術代表団と超党派議員団に接見した。中国赤十字会代表団が訪日し、これが戦後日本に踏み入れた第一陣の中国代表団であった。

1955年、中国経済貿易代表団が訪日し、第3回民間貿易協定に調印した。1956年、日本の旧軍人代表団が訪中した。

これより、周恩来の主導と推進の下、中日両国の民間団体は漁業、華僑、文化、科学、労働界など、相次いで協議を開き締結もし、往来は日に日に増していった。

これに続いて民間外交を道筋とする両国が国交関係正常化への方向に推し進めた。だが、60年代に「半官半民」の新しい段階に入った前夜、1958年5月、岸信介内閣政権発足後に長崎国旗事件が発生した。民間交流は低迷状態に陥った。中国政府は1958年5月に両国間の経済文化交流を中断すると発表せざるを得なかった。この間、周恩来は完全に断ち切っていない人的往来を通じて、積極的に政治家、実業家を招き、関係修復の突破口を探していた。また、膠着状態を打開する「政治三原則」を提案して、日本側に求めた。周恩来は貿易界の名士である鈴木一雄ら日本の友人と会見した際に、「貿易三原則」（政府協定・民間合作・個別配慮）と政経を分けない主張を提案し、貿易三原則は必ず政治三原則と関連すると強調した。それから民間外交に頼り、最終的に両国の関係は中日関係が樹立に達成した。

建国初期の対日民間外交は動き出し、経済交流の水門を押し開けたのである。現実に関立つ成果先行とは言え、いずれも対日民間外交の構想から湧き出るものであり、民間外交思想を構築していく基礎となった。特殊な時代背景に生まれた民間外交が独創的だけに、思想へと抽出整理するまでに時間がかかる。民間外交の要点を敢えて言わせれば、周恩来の主導に制定された「民間先行 以民促官」並びに、その後続く「半民半官」「官民並拳」方針をあげられよう。ともあれ、民間外交とは内外未曾有の創造であり、中国独自の対日外交思想の中核と思える。その価値と意義について、これまでに上げてきた建国以来の大事件への検証を通して考察され、印証される。

3、民間外交の課題

周恩来の民間外交の要点を整理・研究するのに、課題が多く残されている。目下、おおよそ四つの実践から検討されることが考えられよう。

- ①原点が日本と欧州を留学した実践による
- ②内容が国造りの実践で昇華させる
- ③方法論が対日外交の実践から花開ける
- ④価値は後世の実践に検証されよう

もう一つ、周恩来が中国政府を代表して日本に戦争賠償を求めなかった背景も宿題としてとりあげられる。

1952年のサンフランシスコ平和条約によれば、日本は中国に対して、戦争賠償すべきである。しかし、1972年9月、「日中共同声明」の発表により、日本と中国との国交正常化する際、「日中共同声明」の中には、「中華人民共和国政府は、中日両国国民の友好のために、日本国に対する戦争賠償の請求を放棄することを宣言する」と明記していた。

1972年の時点で日本に対して多額の、例えば1200億ドル以上の戦争賠償を請求できるにもかかわらず、なぜ中国政府はそれを放棄したのか。戦時下の日本政府と一線を置く国民に負担をかけたくないと最大な要因と考えられる以外に、当時の中国はソ連を脅威と認識する中（ソ連修正主義と批判）、アメリカや日本などの先進資本主義国と外交関係の構築の必要性に迫り、一つの中国の主権問題（台湾政府への否認）などが山積みであった。さらに日本

の敗戦時に中華民国政府（蒋介石）が中国の窓口であり、戦争賠償の放棄を公言した事実があった。

よって、1972年9月29日、田中角栄と周恩来との間で「日中共同声明」が交わされ、日中国交正常化を最優先処理の懸案として実現した。周恩来は中国国民の計り知れない犠牲やその心情があるにも関わらず、「復讐や制裁では憎しみの連鎖は断ち切れない」という考えがあったことが述べられており、「20年30年経てばわかる」としてこの考えを曲げることはなかったという⁴⁾。また、「日本の人民もわが国の人民と同じく、日本の軍国主義者の犠牲者である」として、当時の政府と国民を分けて考えなければならないとし、中国国民に向けたメッセージも込められていたと考えられる。

こうなった背景には単一の要因の存在があり得ない。きつと複雑な要素が働いたに違いない。当然ながら、こうなった結果も一人二人の独善に寄らず、国家利益を基準に出された指導層の決断になる。想像するにはその瞬間、周恩来の目の前に往時の嵐山の佇まいがかすんでいたかもしれない。

国民の負担をも配慮する角度から、戦争賠償処理のありかたを決めた新中国の政府となるが、その発想の基本に同時期に確定した対日民間外交の思考とは無関係のはずがない。字数の関係により、これに関する論考を別の機会に譲らせていただきたい。戦争賠償に関する周恩来及び中国政府の意向を考察・確認できる資料の一部を参考にあげておく。

中国語の文献

田桓編（1996）「周恩来总理和日本公明党竹入义胜委员长关于中日邦交正常会谈的要点 第一次会谈」、『战后中日关系文献集：1971-1995』、中国社会科学出版社

田桓編（1996）「周恩来总理和日本公明党竹入义胜委员长关于中日邦交正常会谈的要点 第二次会谈」、『战后中日关系文献集：1971-1995』、中国社会科学出版社

田桓編（1996）「周恩来总理和日本公明党竹入义胜委员长关于中日邦交正常会谈的要点 第三次会谈」、『战后中日关系文献集：1971-1995』、中国社会科学出版社

田桓編（1996）「周恩来总理和日本公明党竹入义胜委员长关于中日邦交正常会谈的要点 第一次会谈」、『战后中日关系文献集：1971-1995』、中国社会科学出版社

田健（2013）「日本戦争賠款問題」、『文史精華』

王先勇「中国政府为什么放弃日本的战争赔偿？」、人民网

<http://history.people.com.cn/GB/205396/17308593.html>（2019年8月13日確認）

中共中央党史研究室（2018）「周恩来和平外交政策六条方针是什么」周恩来纪念馆

<http://zhoulai.people.cn/n1/2018/0323/c409117-29885925.html>（2019年8月13日確認）

日本語の文献

家近亮子・段瑞聡・松田康博（2012）『岐路に立つ日中関係—過去との対話・未来への模索』晃洋書房

劉傑（2001）「日本と中国の和解をめざして」『いま、歴史問題にどう取り組むか』岩波書店

矢本あや（2003）「日中歴史問題と内政」

<http://www.j.u-tokyo.ac.jp/jjweb/research/MAR2004/26174.pdf>（2019年8月13日確認）

川島透「日中間戦後補償問題について」

http://www.gakuji.keio.ac.jp/hiyoshi/hou/fukusenkou/3946mc00000274t2-att/lin_zemi.pdf（2019年8月13日確認）

田中明彦 データベース「世界と日本」

<http://worldjpn.grips.ac.jp/documents/indices/JPCH/>（2019年8月13日確認）

「周恩来の日中国交無条件回復提案に関する論評報告」、外交史料館外交記録文書 A-0133、0247-0251 頁。

六、なぜ、文化交流に期待するか

周恩来が念入りの対日民間外交が経済、貿易から始動したかたわら、文化

交流には本格的に力を注いだ。1950年代、中日貿易の往来は迅速に熱が高まってきたと同時に、周恩来は中日文化芸術の交流を推進する機会とし、文化の段階から両国民の互いの理解を進める施政をした。具体的に1956年、梅蘭芳が団長であった中国芸術団が訪日し、空前の好評を得た。1963年に、日本各界が日中国交を回復する要求の署名運動が沸き上がった。1971年、中国卓球代表団が名古屋で行われた第31回世界卓球選手権に参加し、国民同士の友好ムードを引き起こして「ピンポン外交」とまで呼ばれた。1972年、上海バレエ団が訪日し「白毛女」を上映した。

では、文化交流の効果を期待する周恩来の思考経路を考えよう。

1、中学時代の日本観

周恩来は少年期の1913年から1917年の間、南開中学で学んだ。この間に52篇の作文を残した。日本から帰国後のヨーロッパ留学前にこれらの原稿は周恩来の手により整理し、友人たちに渡し保管してもらった。戦乱の時期を乗り越えて、52篇の作文は成文の時間順に沿って編集整理され、2013年の刊行に至った。

周恩来が南開中学に入学して百年後の2013年、天津の南開中学と中央文献研究室第二研部の編著である『周恩来南開中学作文箋評』が人民出版社より刊行された。表題からわかるように、この文集は周恩来が在籍中に書いた作文と論考である。この文集から周恩来は中学時代からすでに日本の動向をかなり注目していたことがわかる。よって、南開中学を卒業した1917年に、日本留学を心決めたのが自然のように受けとる。作文の中で、何度か触れる日本とはどういうものか。それを抽出して表の形にした。

南開中学に入学した時の周恩来の年齢は15歳。日本に対する関心点が作文に反映されている。そうとう日本への知識があったとみなされる。例えば、表中に「紀夏井（きのなつい）」という人物が挙がっている。平安時代の貴族で廉直な官人である。『土佐日記』の作者で知られる紀貫之より少し先行した生没年（詳細不明）といわれる。858（天安2）年、讃岐守に任ぜられ、善政をしいたため人民の要望でさらに2年間留任となったという。

しかし、この人物について関連資料が殆どなく、調べられようもないぐら

時間	題名	内容	注	ページ数
1915年春	「与友人予約春假旅行啓」	旅行先を済南とした。この旅行は日本が拳兵し、我が国の官吏との措置を観察する。	手紙である。旅行の計画を済南にし、日本人の動向を観察している。	74
1915年秋	「子与氏不言利、司密氏好言利、二說孰是、能折衷之歟」	1. 今中国という危急存亡の危機一髪の際に、同族である東の隣国は突然野望を抱き始めた。 2. 現実の相手は日本人であり、弾圧に耐えられず、やむを得ずこれ考えた。	「中国の根本を救う計画」	110
1915年冬	「海軍説」	日本もまた島国でありながら、初戦で我が国を破り、次にロシアに価値、台湾と朝鮮を占領している。近世の新進国家であり、優れた黄色人種でもある。		117
1915年冬	「或多難以固邦国論」	1. 下関条約で日本人が侮辱する。 2. 隣国の日本が第一次世界大戦の機会に乗じて、最終通告を突然出してきた。政府は後ろ盾がなく、時代の先駆者もおらず、屈辱に耐え奈目を承認した。五項目は後ほど交渉する。	哀的美敦之書とは Ultimatum、最終通告である。	125
1916年9月19日	「致同学饒友啓」	よく知っている輪飛兄が日本留学官費を受け、まもなく日本に渡る。		246
1916年11月	「今之憂国時者、金謂国 匱民貧 由于世風奢靡、然泰西学者研究奢靡問題界說不一、波利比阿謂奢靡由于習慣、紀夏井謂奢靡由于性质、二說然否、試探本言之」	1. 明治維新以来まだ犯跡ほどで新しい文明が芽生える時期にあるので、その国民生活はまだ西洋に及ばない。 2. 紀夏井は日本の平安時代に人物であり、平安時代は純朴な気風があった上古の社会とははるかに本質が離れている。そのため彼は奢侈が本性だと述べる。習慣が長く続くと本性となり、奢侈はもともと習慣であったが、今となってはもはや習慣ではなく本性に変わっている。日本は国土が狭く、奢侈の気風が日本に広まると日本が強国となるは実現しがたく、さらに貧弱化していくであろう。故に紀氏は日本の国民が文明の発展を求めず、単に欧米と歩調を合わせ、生活の高い水準を追求することに警戒し、奢侈が本性という観点を掲げた。日本人はこの話を聞き、人間の本性は変えにくいことを知り、質素な生活を送るよう努力した。今日の日本が、その国民にある勤勉且つ純朴な気風は、紀氏の影響を受けたのであろう。		275

(出典は天津南開中学・中央文献研究室第二編研部編著(2013)、『周恩来南開中学作文箋評』、人民出版社より)

いである。恐らく周恩来の関心点が清廉な官僚に集中している。このような角度の観察眼の視野に身近な中国の官僚が居座っている。それに比較すると、紀夏井という望ましい為政者の存在を知り、中国官僚の参考対象にしたのであろう。自然な手法による比較作業ではあるが、周恩来少年に宿る国や民を憂う心情が見えてくる。国政の改善への希求に由来する正義が湧き出でる。

では、ほぼ取り上げられる機会もない紀夏井について、どうやって情報入手したのか。実は少年周恩来の日本観は、南開中学の下級生と関係があった。その下級生の名は陶尚釗（1903 - 1922）、祖籍は紹興市。1903年に奉天（現瀋陽）に生まれ、1917年に南開中学に入学し、周恩来とは密接な関係であった。2人は同郷であるだけでなく、祖母が従姉妹同士であった。

1919年9月16日、天津の学生が21人の会員を募り、周恩来をリーダーに核心的な「覚悟社」を成立した。陶尚釗は周恩来の影響を受け、覚悟社に入会した。1920年1月23日と29日、天津警察庁が周恩来を含む馬駿、郭隆真（女性）そして陶尚釗らの覚悟社の27人の愛国学生を逮捕した。先に出獄した陶尚釗は出獄後、周恩来の指示のもと、多方面で救済活動を展開した。1920年7月17日、周恩来とその他の学生は釈放を勝ちとった。

その後、兄である陶尚銘の援助の下、1920年11月7日に周恩来と陶尚釗は共に上海からフランスに留学した。1922年末、陶尚釗はフランスの下宿先で料理をしていたところ、不注意で火災が発生し亡くなった。19歳であった。周恩来が苦楽を共にした親友との別れを悲しんだことはいうまでもない。

弟ともみなした陶尚釗の父、陶大均（1858 - 1910）は、清末における著名な「日本通」であった。1872年に官費で日本に留学した。1879年に横浜にある中国の駐日領事館に任ぜられた。当時の清政府が派遣した駐日大使は黎庶昌。1891年に北京同文館が東方館を建築し、陶大均は国に戻り教官に任ぜられた。1895年、李鴻章について「下関条約」を締結するために日本に赴いた。帰国後、李鴻章の提携下で外務部左丞などの要職に就任した。1910年7月、陶大均はこの世を去った。彼の一生は日清戦争、戊戌の政変、義和団の乱、李鴻章の補佐のため、二度参事官となるといった経歴であった。終生、「教官」の気質を貫き、著書に励んだ。代表作に『中日戦記』2巻、『戊戌政変紀要』1巻、『庚子劫余録』3巻、『平龔文存』4巻、『劫余委遊草』1巻、『平龔公牘』5巻、『平龔日記』13

巻がある。

陶家の親族との交流を通して、周恩来の日本関心が刺激されたであろう。陶大均が、日清戦争の戦後処理のため、「下関条約」の交渉など重任を担い、李鴻章に同行した。貴重な体験談は無論、外交実践の「教義」として周恩来は薫陶を受けたと推察される。

2、生活文化への注目と寛容性

日本留学中の四つの事例をあげてみたい。

その一、留学して間もなく友人へ。1917年12月22日に、南開中学の同窓陳頌言に書いた手紙に、日本の魚料理を「僕は美味しく戴いて、まるで故里の魚料理の風味だ」。¹⁵

その二、1918年2月4日の日記。「日本に来てから、すべての事について学ばずに見るべきだと思うようになった。日本人の一挙手一投足、すべての行事などを私たち留学の人はきちんと留意すべきだと思う。私は毎日一時間余りを使って新聞を読んでいる。時間は大切だが、彼らの国情などをちゃんと知るべきだ」。¹⁶

その三、「私は日本で生活をし、日本についての印象がとても深い。日本は非常に美しい文化がある。」¹⁷

その四、「日本人民は勤勉で勇敢で叡智だと認識する。」¹⁸

上述のような感想は生活の実体感から自然に発せられるつづりである。総理になってからも目を背いたことがない。

1961年2月28日、日本の客人と面会したとき、

「中日両国は戦争から15、6年過ぎて、新たな要素が現れてきた。少なくない日本人は中国から帰っていったが、中国に残っている日本人も少なくない。

¹⁵ 中共中央文献研究室・南開大学編(1998)、『周恩来早期文集(1912年10月-1924年6月)』上巻・中央文献出版社・南開大学出版社、304p.

¹⁶ 前掲書、327p.

¹⁷ 中華人民共和国外交部・中共中央文献研究室(1990)、『周恩来外交文選』・中央文献出版社、90p.

¹⁸ 中華人民共和国外交部外交史研究室(1993)、『周恩来外交活動大事記(1949-1975)』・世界知識出版社、88p.

戦争は人々を対立させたものだったけれども、互いの接触と理解も増やしている。ご存知のように、5000名余の日本女性は中国人と結婚している。これほどの数は歴史上稀なことだ。両国はすでに親戚関係となっている。」¹⁹

1954年10月11日、日本の友人と三時間以上の会談の席にて。

「1945年8月15日をもって、日本軍は武器を捨てた。その前日まで15年間を戦っていたけれども、(中略)一旦、武器を捨てたら、日本人は中国人に友好的になった。中国人も日本人を友人として、憎みを抱かない。最も大きく、最も感動的な出来事が東北で起きたのだ。当時、武器を卸した多くの日本軍は帰国せずに、一部の日本民間人と一緒に中国解放軍に参加した。病院で医者や看護婦をやる方もいれば、工場で技師や、学校で教師をやる方もいる。昨日は、まだ戦場で戦いあったが、今日は友人となった。中国人民は彼達を信頼し、憎みを持たない。大多数の日本の友人が仕事を良くして、助けてくれている我々は彼達にとっても感謝している。彼達が皆自発的に集まってきたもので、我々は捕虜にして強制連行したものではない。昨年、大多数の方が帰国された。2万6千人余りもいた。信じられなければ、日本に帰ったら、彼達に聞いてみていい。戦いあっていた人々は武器を投げ捨てたら、一緒に仕事をして、しかも互いに信頼している。多くの中国人は負傷して、日本人医者に手術をしてもらう。病気の時、日本人看護婦に看病してもらう。とても信頼している。工場で、中国人は日本人技師に信頼して、一緒に機械を動かしている。科学院で、中国の科学技術者は日本人科学技者の研究成果を信頼している。これは友情だ、真の友情だと言える。信頼できる友情だ」²⁰

1954年10月11日、日本の客人と面会。

「ここ百年来、日本は経済と文化では中国の先を進んでいる。明治維新を通じて、日本は工業化した。中国はこれまでの長い間に、各面において立ち遅れてきた。中国の文化が古いとよく言われるが、あれは昔だった。歴史ではその地位があるけれども、ここ百年の中国は発展が遅れを取っている。」

¹⁹ 中華人民共和国外交部・中共中央文献研究室(1990).『周恩来外交文選』.中央文献出版社, 305p.

²⁰ 前掲書, 88p.

「ここ八十年来、中国は西洋文化を学んでいるが、多くはあなた達のところを通して学び取ったものだった。健在の中国の古い世代で、今、政治活動に従事している方々の多くは日本で留学したことがある。在席の郭沫若先生が留日生の重要な代表的人物だ。彼はあなた方達の帝国大学で医学を勉強したことがある。日本文化は私達にこのような良いことを与えてくれたので、私たちは感謝すべきだ」。²¹

1972年4月21日、三木武夫氏一行と会見したとき、

「(中国と日本は) 歴史上、言われた通り、一衣帯水の関係を保ち続けてきた。その中で、ただの半世紀、50年だったが、中国人民だけではなく、日本人民も軍国主義の災難を蒙った。軍国主義の被害を蒙ったから、中国人民が自覚できた。団結ができた。だから解放された。あなた達、軍国主義はあなた達の広範な人民にも直接被害を蒙らせたので、戦後、軍国主義の復活に反対する人民が益々多くなっているのだ。従って、我々両国人民とも、軍国主義という反面教師で目覚めさせたのだ」。²²

1954年10月11日、日本の客人に語った。

「昔、日本は中国を侵略したので、今日、中国が強くなったら、日本を脅かさないと皆さんは聞くかもしれないが、私達は誠心誠意で世界平和のために奮闘していると皆さんに保証する」「いわゆる『同文同種』も『共存共栄』も他国を侵略するためではなく、排斥するためでもない。平和共存のためだ。」「正常な往来に従ってやれば中日の文化交流の発展力はとても大きなもので、鍵が平和共存だ。どっちも別の思惑を持つべきではない」²³

上述した引用は一部に過ぎない。そう語られた背景と環境と対象によって内容も異なる場合があるものの、周恩来が常日ごろ、人間同士としての日本人像を抱き、生活面における日本への理解をしている実態が、上述の引用を介して考察できると考えられる。日本人なら普通に持っている思いやりを深

²¹ 前掲書, 90p.

²² 中華人民共和國外交部外交史研究室(1993).『周恩来外交活動大事記(1949-1975)』. 世界知識出版社, 583p, 629p.

²³ 《周恩来外交文選》, 中央文獻出版社1990年版, 第87-90、495頁。

く理解していたからであろう。

周恩来の姪である周秉徳さんが筆者にて感動した往時の逸話を教えた。

1972年9月25日のこと、日中平和条約締結で日本の田中角栄総理大臣と大平正芳外相の訪中を迎える段取りを確認する夜、周恩来が徹夜で仕事する習慣化にかかわらず自分の秘書ら担当者に伝えた。「私は生活習慣を田中総理に近づくよう調整するつもりなので、私へは夜10時以降に書類を持ってこないこと」と釘を刺した。その理由は、毎日、田中角栄は早朝5時に起床する習慣があったから、数日は中国滞在中の田中総理に合わせて自分も5時起きを心掛けるからである。田中総理の細部の習慣まで、事前にきっちり情報収集していたという。例えば、中国政府主催の歓迎の宴で演奏されたのは、新潟県の民謡「佐渡おけさ」であり、郷里の歌を聴いた田中総理はこの想定外のもてなしを大変喜んだ。

相手をつねに気遣う周恩来の性格があらわれたものと考えていい。寛容の精神を習性しているから。日本軍と15年戦争を戦い抜き、国共内戦も勝ち抜き、新中国建国後も混乱の政局を治め、世界外交の幾多の難局を乗り切った政治家・革命家にとって「気遣い」と寛容性を終生忘れていなかった。それは本能的に備わっていたものとは別に、日々の涵養が必須ではないか。このところも日本と関わりが考えられる。日本留学によって異国の日本を冷静に客観的に接する機会を得た。さらに一か月の京都逗留、あえて極言すれば嵐山の逍遥によって、持ち前の気遣う感性を鍛えられ、柔軟性のある多元な観察眼を磨きに掛けたのだろう。寛容性は対外交渉の潜在効果を滑らかに高められ、国際関係における難題の解決現場を潤わせるのであろう。

3、両国共有の歴史文化を思考の素地に

両国の歴史文化の源流を重んじると、両国の風土の深層に潜在してある共有に感銘せずにはられない。このような見地に立つと、日中間の問題点を図るスパンが長くなる。周恩来の対日認識の特徴がここにあり、涵養性と寛容性の持続可能な源泉でもあろう。

世界知識出版社発行の『研究周恩来——外交思想与实践』（中国人民共和国外交部外交史編纂 1989年）の中に文化人夏衍の論著「永遠に忘れられない教示」が収録されている。その中に周恩来が1955年7月に重要な指示をした記述がある。それを整理すると、

①すでに国交を結んだ国家に対しては政府を外交の主体とし、民間外交は補足とする。

未だ国交を結んでいない国家に対しては、民間を先行し、「以民促官」とする。

②日本に対してここ60年だけではなく、中国との関係が二千年の歴史ある角度についても要考慮する。日本が我々を侵略した。だが、日本と我が国は一衣帯水の近隣でもあり、漢や唐代から悠久の友好付き合いをした。日本人は人生哲学、経済文化、生活習慣にいたるまで、中国とは切っても切り離せない関係がある。そのため現在の状況下で、日本と付き合いには、自然に進めていき、無理をしないことである。自然にでなければ、中国の民衆は対応せず、無理を大きくさせ、日本政府はなにも行えなくなる。そのため「瞻前顧后、日積月累、水到渠成（なるようになる）」が必要であり、まずは文化、体育、貿易からことを起こし、各種民間ルートを開拓し拡大する。友と広く交わり、民を以て官を促す、細流を河川と成し、熟して成るのを待つ。平和五原則を基本にし、国交成立の目的を達成する。

③対話の外交効果を唱える。双方の掛け合いに心かけるよう、「兵対兵、将对将（対象にみあう対応）」のことわざを覚えておく。また、異なる意見を交換することは大変有益であるとしている。

④相手国の長所を気づき、学ぶべきことを強調し、排外主義であるといふいかなる言行を決してないとした。

では、建国初期の「民間先行 以民促官」の段階に対し、周恩来は経済、貿易交流からという採択を決める際、本質の何かを冷静に透析して直視にしたのか。江培柱・邱国洪の『中日関係舞台上の輝煌楽章』によれば、民間が互いの往来通商を行えば、日本国民が中日の間の国交回復が真っ先に日本人に有益であるとわかる。他方中国人民にも有益であることから、日本政府が対中政策を変えることになるだろうという。そして、周恩来は胸が自信に満ちた預言をした。「中日両国が未だ正常な関係を回復していないから、国際法に則

り、未だ戦争状態が存在している。しかしこれは両国民の友好活動と民間協議を調印した妨げにはなっていない。このようにまずは民間よりの頻繁往來かつ協議達成から始め、両国関係を大々的に発展させていく。最後に残った外交上にて戦争状態の終結を宣言してから正常関係を回復するのである。」「国民外交方式でしていくと、日本の団体の訪中が多くなり、我々の団体も多く訪日している。両国がやろうとする事を行えている。最後は両国の総理と外相の調印とシャンパンの乾杯が残っているだけだ。」

繰り返して強調したい。周恩来が留日体験を通して、歴史的に日本を観察する知恵を身につけたと伺える。これも周恩来自身の話を通してのぞかれる。

1954年10月、周恩来総理は日本学術文化訪中団と会見した時に、「歴史上、私たちの文化は互いに交流し、影響を与えていた。正常な往來に照らし、中日の文化交流は大きな発展前途があり、そのカギは和平共存です。」と話した。たった四十七文字の話であったが、その中で中日和平発展を促進する目的、方向と方策を指し示している。こうなったのも目の前の中日関係のみの考察ではなく、二千年來の両国交流史に対比しながら時事問題への対応を思案した。そこから、両国間の正常往來の目標が和平のほかにはない選択になる。平和を実現する有効なルートは両国民共有のものとなると、一押し文化交流が上がってくるのである。他方文化交流には経済と貿易の交流を必要とし、民間から推進しなければならない。つまり、中日関係の推進には、経済と文化の両輪を共に駆使し、民間の軌道から走り出させる段取りがいる。これを以て特色のある民間外交を体現したい次第であろう。

対日本外交に周恩来が史学的視野を持たれていることを周秉徳女士からも伺った。女史によれば、平和条約を締結した1972年、田中角栄首相を北京から見送るときに、周恩来はこう言った。

「私たちと日本の付き合いは二千年ものの歴史と半世紀の対立があります。今日、私たちは時代が螺旋的に前進することを見ました。」

想像に難くないが、建国初期の周恩来は政務が多忙を極め、外交の概念と定義を整理する余裕がなかった。比較的と言えることは、彼は多くの実践に心血を傾けた。不完全な統計ではあるが、1953年7月1日から1972年9月23日の中日国交正常化前夜まで、この19年間もの間周恩来が面会した日本人は

287回、323の代表団（或いは多くの客人）に上る。日本の政治、経済、文化の各領域、工業、農業、商業、学術社会などあらゆる階層に幅広く接触し、余力を残さずに中日関係の深い発展を推進した。これは周恩来流の民間外交の実践であり、行動で示す民間外交とは何かでもある。このような対日姿勢は、結果的に対象国の国民の心をも打たれ、日本側の共鳴を引き寄せられることに至った。ここで再度、周秉徳女士の語った話を引用しよう。

「国交正常化への歩みを止めずに、世代友好を追求しようとした。そのため中日国交正常化以降、周恩来は依然両国民の民間往來を特別に重視していた。重い病身であった時でさえ病院にて池田大作と会見に臨むよう持ちこたえていた。池田大作は「中日友好関係に関して、総理はもともと民のためを思っていた。一枚の紙の条約が簡単に変化を生んだ。総理の考えはく民衆が互いの真摯な理解や信頼関係を樹立するだけで、真の中日友好である」と述べた。」

「日本人は周恩来総理を崇敬し敬愛していた。2011年8月、NHKがゴールデンタイムに4日連続して特集映像・家族と側近が語る「周恩来」を放映した。この特集は高い視聴を呼んだ。中国への関心の深い両陛下もご覧になったという。」

周秉徳女史の言及した『家族と側近が語る「周恩来」』の背景について、少し付け加えさせていただく。2012年4月20日、訪日中の周恩来親族一行が王敏研究室を訪ねてきた。その夜9時ごろ、皇后さまから研究室に電話をいただいた。周恩来による日中平和へのご尽力に感謝する温かいお心遣いであった。無論、直ちに皇后さまの御旨を周秉徳女史にお伝えした。

このような経緯があって、2017年8月29日筆者が周秉徳女史の自宅を訪ね、来る9月8日、周女史が人民大会堂で開催する予定になっている中日国交正常化45周年記念式典のスピーチの原稿内容について語り合ったのである。



2017年8月29日 周秉徳女史宅にて

七、桜に思いを

1979年4月、周恩来夫人の鄧穎超女史を代表とする一行が日本に招待された。周恩来の「雨中嵐山」の詩碑の除幕式は創詩の4月5日に選ばれた。周恩来の護衛であった高振普將軍はこう追憶している。

1979年4月5日も小雨で詩碑除幕式の周辺はかすんでいた。ところが鄧穎超一行が詩碑の前に立たれた瞬間、雨が突然止んだ。除幕式が始まると、空から一筋の光が差しこんで、詩碑を照らした。この風景は「雨中嵐山」に描写されたイメージと重なるのである。

瀟瀟雨、霧蒙濃、
一線陽光穿雲出、愈見姣妍。
人間的万象真理、愈求愈模糊、
——模糊中偶然見着一点光明、真愈覺姣妍。

(訳) 雨濛々として霧深く

陽の光雲間より射して いよいよなまめかし
世のもろもろの真理は 求めるほどに模糊とするも
——模糊の中にたまさかに一点の光明を見出せば
真にいよいよなまめかし

この神秘的な情景は、一心同体の夫妻ならとしか思えない。挨拶中の鄧穎超がこの瞬間、原稿から離れて生身の感受を語りだした。

「太陽が出て来て、私たちを照らしました。これは中日両国、そして両国民の友好を象徴している無限の光です。」「絢爛なる桜が自然の法則にて花開き、無数の木々にて一斉に咲き開き、またその内に何処にも留まらず、勇ましく去っていきます。桜が青年だった周恩来に人生の真理を追い求めることに対して、多大なる啓示を与えたと思います。」

鄧穎超の内心から発したこの言葉から、明確な意味をとらえることができる。「千樹万樹同時開放」の桜が人々の夢を表すものとするれば、「自然法則」が平和と繁栄を凝縮する万人の願望と解されよう。これは「青年だった周恩来に



(<https://mp.weixin.qq.com/s/H7UpIM-cL7ulAdY6F3paYw> より)

人生の真理を追い求めることに対して、「多大なる啓示を与えた」ものを示唆する。日本人も中国人同じ夢を目指すなら、人が主体である民間に信頼をかけてもよい、対日民間外交の展開が期待できると考えられよう。このような思考の行き先に、対日民間外交が形成されつつあったかと思えば、周恩来の姪・周秉徳女史の話に耳を傾けることにしよう。2017年9月8日、人民大会堂で開かれた中日国交正常化45周年記念パーティーにおけるスピーチ原稿によるものである。

伯父の周恩来はかつて若い時に日本留学に行き、日本国民の善良さと友好が彼の深い記憶に残り、一生忘れがたいことでした。新中国が成立してまもなく、伯父は日本の友人に対してこう述べました。「私は日本で生活したことがあり、日本に対する印象はとても深いものである。」1974年12月5日、病身であった伯父は日本の創価学会会長の池田大作と会見した際に、再度青年時代に日本で生活していたことを思い出し、懐かしく言った。「私は日本から帰国してすでに55年です。1919年の桜が満開の時期に戻って来ました。」日本留学は伯父を日本そして、日本国民を深く理解させ、日本国民に対して深く厚い感情を抱いています。

周秉徳女史は中国政治協商委員会を務め、中国新聞社の副社長でもあった。2012年4月20日、周女士とその兄弟姉妹の周秉宜女士、周秉華さん及び周

和さん一行が小雨の中、東京千代田区にある法政大学を訪れた。当日の昼過ぎ、一行は外堀沿いの桜道で王敏研究室の留学生たちと共に「雨中嵐山」を朗読した。



(左から周恩来の姪周秉華、周秉和、周秉宜女史、周秉徳女史。右から周秉宜女史のご主人・任長安、右三番目は王敏。ほか三人は留学生)

周恩来は1919年に帰国してから55年の年月が過ぎ去った。国のため人民のため、心血を注いで政治に邁進していた日々、桜を見る暇がなかった。しかし日本滞在した1918年と日本を去る1919年の間に2回見た桜の美しさを忘れたことはないという。平和条約を結んで2年後の1974年12月5日、病状が回復傾向をみせたとき、周恩来は創価学会会長である池田大作に対して懐かしそうに言った。「私が日本から帰国してもう55年です。1919年の桜の満開の季節に戻って来ました」。桜が周恩来の記憶から消えていなかった。生涯にわたって日本の桜の満開の風情が脳裏に焼き付いていたからである。

桜への思いが連綿と連なっている。後世にとって周恩来の日本観及び対日思考の形成過程を考察するのに重厚な材料となる。

おわりに

本論は嵐山に対する二度のフィールドワーク及び周恩来が両国の特殊な歴史文化関係に対する洞察の深層を考察した。これにより、周恩来は対日外交

の中で、始終中日両国民に期待をかけていた理由が見えてきた。対日民間外交の提唱は1919年の嵐山考察とは無関係ではない。あの時に出会った人物群像と嵐山の歴史人文環境がいずれも対日調査の第一次資料とも見建てられる。周恩来の対日認識の全過程において、日本の風土文化への体験と洞察が体現されている。

中国建国の功労者・蕭向前が「周恩来の対日関係に於ける卓越なる貢献」（『周恩来研究——外交思想と実践』世界知識出版社 人民共和国外交部外交史編纂室 1989年）でこう分析している。周恩来の日本留学が「救国救民の真理を探すため、国難に赴く同志を見つけるためであった。1949年に中華人民共和国が成立し、周恩来は皆が期待していた総理に任ぜられ、その生命の最後の一息まで、彼はひたすらに手ずから対日業務を握っていた。当時、中日が双方とも少しも接触がない民間と半官の外交を経て、正式国交を樹立した。実に足かけ23年の時間がかかった。樹立以降、周恩来は平和友好条約締結のため、三年を苦勞に費やした。十分な理由を以て言えることには、周恩来が中日関係正常化の全工程を率いていたからである」。

「留日」の過程は良い国際関係の経験と知識を構築の蓄積を与えてくれ、留学現場は周恩来に人民主体の外交を構築する信念を固めた。彼は日本体験から、中日両国を結びつけた共通の歴史文化の脈を把握し、両国の結び目が外された危機から新たに結びつけ直した。

2019年4月5日、青年周恩来の詠んだ「雨中嵐山」の創詩の100年、嵐山公園に「雨中嵐山」の詩碑建立40年を迎えた。それにあわせて、筆者が『嵐山の周恩来』を三和書籍から上梓した。一か月後の5月20日、京都市長の門川大作氏をはじめ150人の有志が、日中国際文化交流協会の主催のもと、嵐山の詩碑で厳かな献花式を行われ、市内のホテルで盛大な記念式を催した。この記念日も雨が時々降った。周恩来が百年前に探訪した嵐山と同じく、「雨濛々として霧深く 陽の光雲間より射して いよいよなまめかし」であった。

歴史は嵐山の桜の雨情によって清められた。日中両国の有志が周恩来の平和実践・対日外交を追想してつきるときがなかった。

付録・周恩来略年譜

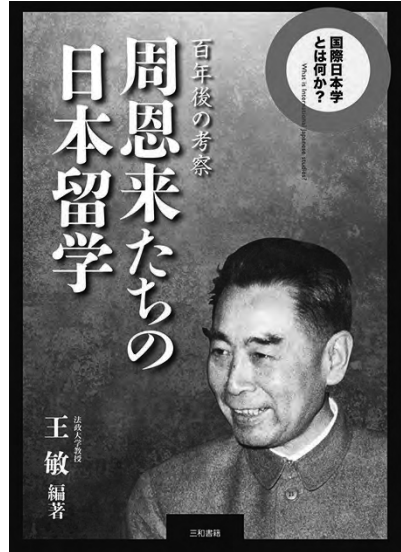
西暦	事 項
1898	3月5日、江蘇省淮安府陽阜（現在、淮安市）で生まれ。父は周貽能、母は万冬児。後に伯父・周貽淦の養子となり、伯母・陳氏に育てられる。
1907	実母・万冬児、養母・陳氏没。
1910	夏 伯父・周貽謙とともに東北奉天省銀州（現在、遼寧省鉄嶺市）に転居、銀岡書院に入学。 秋 奉天（現在、瀋陽市）における伯父・周貽賡の家に居候し、第六両等小学堂に転学。
1911	辛亥革命の影響で辮髪を切る。
1913	周貽賡とともに天津へ。南開学校に入学。
1914	3月 友人とともに「敬業群衆会」を作り、智育部長に選出。 10月 会報『敬業学報』を創刊。
1915	8月 新しい校報『校風』を創刊。編集・経営に携わる。 10月 新劇『一元銭』で女形を演じる。
1916	学校内国文特別試験で一位を取る。
1917	6月 南開学校卒業試験で国文最優秀賞を取り、卒業式で卒業生代表として挨拶。 9月 日本に留学。 10月 東亞高等予備学校に入学し、日本語など入試科目を勉強。 12月 留日南開同学会に入会。
1918	1月 伯父・周貽奎没。 3月 東京高等師範学校に落ちる。 4月 神田の書店「東京堂」で十月革命に関する雑誌を読む。 5月 留日学生救国団を立ち上げ。 7月 第一高等学校に落ちる。
1919	1月 河上肇の創刊した『社会問題研究』を読む。 3月 母校・南開学校が大学を創設することを知り、帰国進学を決める。 4月 京都の友人を訪れ、嵐山と円山公園で花見を楽しむ。船で神戸から天津へ。 5月 五四運動の勃発後、天津で学生連合会を立ち上げ。 7月 『天津学生連合会報』を創刊。 8月 天津の学生代表は北京で逮捕・拘束されたため、数百人を率い北京へ抗議。 9月 友人とともに「覚悟社」を結成。南開大学文科学科に入学。 12月 天津新学連を立ち上げ、執行科長に任ぜられる。
1920	1月 天津の学生代表として直隸公署に請願、投獄。獄中でマルクス主義を勉強。 7月 釈放。 11月 ヨーロッパで勤工儉学。
1921	張申府らの紹介で中国共産党に入党。
1922	旅欧中国少年共産党（後に中国社会主义青年团旅欧支部に改名）を結成。中国社会主义青年团旅欧支部書記に任ぜられる。中国共産党旅欧支部のリーダーとなる。
1924	秋 帰国。広東黃浦軍校政治部主任に任ぜられる。

西暦	事 項
1925	1月 中国共産党第四回代表大会に出席。 8月 広州で鄧穎超と結婚。 9月 国民革命軍第一軍政治部主任。
1927	1月 中国共産党上海区委軍事運動委員会書記。 3月 上海労働者第三回武装蜂起を組織。 8月 南昌蜂起を組織。
1928	中国共産党第六期一中全会で中央政治局常務委員に選出。
1929	中国共産党第六期二中全会で政治局委員に選出。
1930	モスクワに赴き、コミンテルンの会合に出席して中央ソビエト区と工農紅軍について報告。
1931	1月 中国共産党第六期四中全会（拡大）で政治局常務委員に選出。中共ソビエト区中央局書記。 10月 中共ソビエト共和国臨時中央政府、樹立。中央執行委員会委員に選出。
1934	1月 中国共産党第六期五中全会で政治局常務委員に選出。 10月 長征開始。
1936	西安事件。西安で張学良と会談、調停。
1937	6月 廬山で蒋介石と会談。 12月 中共中央代表团と長江中央局が合併。副書記に任命。
1938	国共合作。国民政府軍事委員会政治部が設置。副部長に任命。
1939	馬から落ちる。治療のため、訪ソ。
1945	6月 中国共産党第七期一中全会で中央政治局常務委員、書記処書記に選出。 8月 重慶会談。 10月 双十協定を結ぶ。
1947	延安を撤退。毛沢東、任弼時らと作戦を指揮する。
1949	中華人民共和国、建国。政務院総理兼皆外交部長に任ぜられる。
1950	朝鮮戦争の軍事援助のため、訪ソ。
1951	2月 第一次五カ年計画を起草。 9月 中国政府を代表してサンフランシスコ平和条約に反対する声明を出す。
1952	6月 北京で第一次中日民間貿易協定を締結。 11月 中国残留日本人の引揚問題を打開。
1954	4月 ジュネーブ会議に出席し、中国政府を代表して平和五原則を提唱。 9月 第一期全国人民代表大会で政府活動報告を行う。
1955	バンドン会議に出席。
1956	ベトナムとカンボジア、インド、ミャンマー、パキスタンを訪問。
1957	日本社会訪中団と会談。
1958	朝鮮を訪問。志願軍の撤兵を発表。
1959	9月 石橋湛山元首相と会談。 10月 日中友好協会の設立を決定。

西暦	事 項
1962	松村謙三氏と会談、貿易三原則・政治三原則を提出。
1963	アフリカ 11 ヶ国及びアルバニアを訪問。
1964	4 月 互いに常駐機構を設置し、代表を交換する会談覚書に調印。 12 月 第三期全国人民代表大会第一回会議で政府活動報告を行う。「四つの近代化」を提起。
1970	4 月 朝鮮訪問。連合声明を発表。 松村謙三氏と会談、中日貿易の拡大について四つの内容を確定。
1971	3 月 ベトナム訪問。共同声明を発表。 4 月 アメリカ卓球チームと会見。 6 月 公明党訪中団と会談。 10 月 アルバニア決議。
1972	2 月 ニクソン大統領訪中。米中共同宣言を発表。 9 月 田中角栄総理訪中。中日共同声明を発表。中日国交正常化。
1974	1 月 大平正芳外相訪中。中日貿易協定調印。 12 月 池田大作会長の率いる創価学会訪中団と会見。
1975	1 月 第四期全国人民代表大会第一回会議で政府活動報告を行う。 6 月 賀龍の葬儀で弔辞を述べる。
1976	1 月 8 日、没。享年 78 歳。



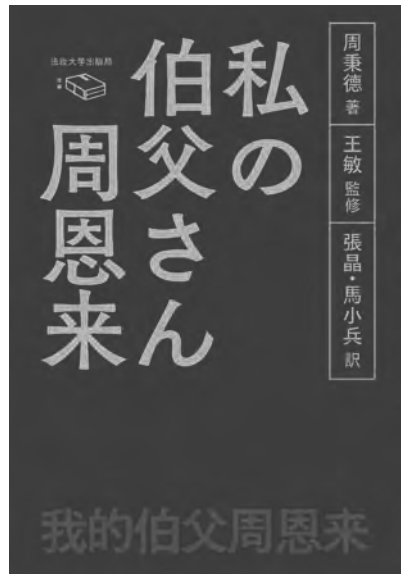
王敏訳『周恩来青少年論説文集』
(新世界出版社、2015年)



王敏編著『周恩来たちの日本留学：百年後の考察』
(三和書籍、2015年)



王敏著『嵐山の周恩来：日本忘れまじ！』
(三和書籍、2019年)



周秉徳著・王敏監修『私の伯父さん周恩来』
(法政大学出版局、2020年)

<ABSTRACT>

Zhou Enlai and an Origin of His Private Diplomacy to Japan: Reading *Raining Arashiyama* Written in 1919.

WANG Min

Before returning to China, Zhou Enlai visited Arashiyama Mountain, Kyoto in 1919, and wrote a poem known as *Raining Arashiyama*. Why did he visit Arashiyama on a rainy day? It is probably because he wanted to learn more about Suminokura Ryōi, the Japanese Yu the Great. This trip had a significant impact on China's policy toward Japan afterwards.